

東欧史研究オーラル・ヒストリー vol. 2

伊東孝之氏インタビュー 第1部

東欧学を志すまで ― 生い立ち、遍歴、留学

東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会編



東京外国語大学・海外事情研究所

2026 年

東欧史研究オーラル・ヒストリー vol. 2

伊東孝之氏インタビュー 第1部

東欧学を志すまで—生い立ち、遍歴、留学

東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会編



東京外国語大学・海外事情研究所

2026 年

第1部 目次

■はじめに	5
■伊東孝之氏インタビュー	9
1. 個人的動機：東欧（史）を研究することになったきっかけについて	9
2. 学生・院生時代（1960年代）の社会的背景 ——日本に伝えられた「東側」の像	16
3. 戦後日本における東欧研究と大学院時代	19
4. ドイツ留学の経緯（1960年代後半）	31

■第2部目次

5. 留学時に体験したポーランド、ソ連、東西ドイツの状況やそれぞれの違い、
冷戦の最前線に留学されて印象的だったこと
6. 体制転換によってポーランドやロシア、ドイツで変わったこと、変わらなかった
ことについて、何を感じた／感じるか

■第3部目次

7. 先生がおられた頃の北大スラ研の様子について（1972～1993年）
8. 早稲田大学での仕事と次世代教育について（1993～2012年）
9. 現在の東欧（史）研究の在り方と研究に際して重視してきたこと
10. ウクライナ情勢の今後と現在の活動についての展望

はじめに：

本書は、「東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会」ⁱによる、東欧史研究者との世代間対話・経験の継承を目的とするインタビュー活動の成果の一部である。東西冷戦期、とりわけ1960年代以降に東欧の社会主義圏を実体験された研究者世代の方々にお話を伺い、当時の経験、冷戦終結後の東欧社会の変化、さらに日本における戦後の東欧史研究を取り巻く環境の変化について、貴重な証言を残していくことが活動の主目的である。当研究会では既に、ハンガリー近現代史研究者の南塚信吾氏とのインタビュー記録を刊行している。南塚氏に続く本稿では、ポーランドを中心とする国際関係史家の伊東孝之氏からお話を伺う運びとなった。インタビューは2022年11月12日、2023年1月7日、2023年1月22日の三度にわたって、オンライン（Zoom）にて開催した。当研究会からは、阿南大、香坂直樹、辻河典子、中根一貴、福元健之、森下嘉之が聞き手としてインタビューに参加した。

次に、伊東孝之氏の経歴及び研究活動について簡単に紹介しておきたい。氏の経歴については本稿で詳細に述べられる予定であるが、伊東氏は1941年に三重県に生まれ、東京大学教養学部、同大学大学院社会学研究科国際関係論専攻にて研究を始めた。1968年から1972年にかけて、当時の西ドイツ（西ベルリン）に留学し、帰国後は北海道大学スラブ研究センター（当時）および早稲田大学にて研究並びに教育活動に従事された。本稿で紹介される通り、伊東氏の研究活動とその対象は多岐にわたっている。氏の研究活動の背景には、国際関係論で培った視野の広さと古典を中心とする理論的背景に加えて、世界各地で生じた事象の一つ一つを、メディア記事や史資料を通して丹念に読み込む継続性、何よりもそうした活動を長年にわたって続けることを可能にしたエネルギーがある。本稿の読者は、研究に対する氏のほとばしる情熱を随所に感じ取ることができるだろう。

伊東氏の主な研究成果として、『東欧現代史』（有斐閣、1987年。木戸蒨氏との編著）、『ドイツ現代史』（山川出版社、1987/1994年。成瀬治、黒川康氏との共著）、『ポーランド現代史』（山川出版社、1988年）、『「連帯」10年の軌跡 ポーランドーおしつぶされた改革 チェコスロヴァキア』（日本放送協会、1990年。南塚信吾氏らとの編著）、『東欧を知る事典』（平凡社、1993/2001/2015年、南塚信吾氏らとの編著）、『スラブの国際関係』（弘文堂、1995年。木村汎氏らとの編著）、『東欧政治ハンドブック——議会と政党を中心に』（日本国際問題研究所、1995年）、『ポーランド・ウクライナ・バルト史』（山川出版社、1998年。井内敏夫、中井和夫氏との共著）、『ポスト冷戦時代のロシア外交』（有信堂高文社、1999年。林忠行氏らとの編著）、『せめぎあう構造と制度——体制変動の諸相』（正文社、2008年）などがある。このほかに、スラブ研究センター時代に携わった研究活動については、

数多くの報告集によってまとめられている。上記の研究活動に加えて、氏は現在、SNS 上でも積極的な情報発信を行っている。とりわけ、2022 年 2 月に勃発したロシア・ウクライナ戦争については、連日のように現地語メディアの記事紹介を続けている。

本インタビューは、前述の通り Zoom オンラインにて行ったものであるが、質疑応答は事前に当研究会において用意した内容に加えて、当日の流れの中で生じた「対話」も多く含んでいる。本稿はこのような一連の「対話」を書き起こしたものであるが、インタビュー自体が三度にわたって行われたため、分量も膨大なものとなった。加えて、本稿の記述には、インタビュー後の複数回の原稿の往還を通じて、伊東氏ご本人によって加筆修正がなされている。このような理由から、本稿では伊東氏の上承を得たうえで、趣旨を変えない前提で修正を施している。人物説明などについては伊東氏によって本文内に脚注を作成いただいたほか、本文説明に関しては当研究会によって巻末注を加えている。併せてご参照いただきたい。最後に、本稿の記述は伊東氏ご本人の記憶と証言によるものであり、実際の事実関係を必ずしも保証するものではない点をお断りしたい。

(2024 年 10 月) (森下嘉之)

■編集に際しての特記事項

- ・第1部「はじめに」にもあるが、本書各ページの脚注はインタビューの伊東孝之氏が記した注であり、注番号は算用数字で示している。一方、本書各部の末注（注番号は小文字のローマ数字）は編者の東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会による編集注である。
- ・本書の注番号は、脚注・末注ともに第1部からの通し番号である。
- ・本文中の丸括弧（ ）はインタビューによる補足、亀甲括弧〔 〕は編者による補足である。
- ・本文中の地名表記は、原則として、インタビューの表現・表記に基づいている。

インタビュー：

1. 個人的動機：東欧（史）を研究することになったきっかけについて

——今回の伊東先生へのインタビューは、私たち東欧史研究会の若手有志一同で、日本の東欧史研究を牽引されてきた方のお話を後世に伝えていきたいということ、そして先達がどのような経験をされてこられたのかということとを共有したいということで、開催に至りました。私たちは、1970～80年代生まれ、体制転換の前の時代を実際に体験しているとは言えない世代です。そこで、社会主義時代の研究の進め方や現地での体験といったご経験を伺いたいということだけでなく、その際に何を感じられたのかということとを世代間対話のような形で伺いながら私たちも勉強していけたらと思っております。よろしくお願いいたします。

私は東欧に関心を持つのが遅かったです。大学の4年生、留年したので5年生の時期です。入学した時は東欧に関する知識はまったくありませんでした。その点は皆さんと違うところかもしれません。その意味では遅れて東欧研究に入りました。東欧への意識はまったくなかったです。

三重県の農村部出身で、実家は農村部の商人でした。東欧研究に入って感じたのは、東欧諸国のユダヤ人に似た存在ということでした。ユダヤ人の場合は宗教なども違いますが、私の場合はその土地出身でしたので、もちろん周囲との違和感はありませんでした。

家の宗派は浄土真宗西本願寺派で、一向一揆の宗教でした。三重県北部は長島一揆の影響で門徒衆が多かったのです。彼らは農民だったので、私の先祖もその可能性が高いと思います。武士はわれわれの地方では浄土宗か、あるいは禅宗、曹洞宗でした。

五代前の高祖父は行商人のようなことをやっていて、これもユダヤ人に近いです。のちに店を開いたようです。曾祖父の代には村で繁盛して銀行の支店もやっていたと言います。「伊東屋」として知られていました。そこで、曾祖父は子供、つまり祖父を四日市の商業学校で学ばせました。祖父はその後大阪の堂島で米問屋を開いて成功しました。祖母や母の話では左うちわの生活で、街に出るときはタクシーで出掛けたと言います。1920年代にタクシーがあったかは知りませんが(笑)。だんだんと世の中の統制が厳しくなってきた、1930年代には店を引き揚げて三重県に戻ってきました。

父は私の母の家に外から婿入りしてきた人間でした。その家が武家で、父方の曾祖父は藤堂久居藩の勘定奉行でした。明治維新以後、武家は没落の道を辿りましたが、そもそも武家では長男以外は没落する運命でした。祖父は次男坊でした。師範学校を出て小学校教師となり、三重県北

部を転々としていました。父も祖父と一緒にあちこち引っ越しましたが、初等教育を受けたのは三重県桑名でした。父は四日市の旧制中学から名古屋高等商業高校(現在の名古屋大経済学部)を出て、東京海上に勤務するサラリーマンとなりました。父方から見ると私は大卒の三代目ですが、親族に知識人らしいものは一切いませんでした。実直なサラリーマンか、技術者か、医者か、弁護士かでした。作家、芸術家、大学教授といったいわゆる知識人は1人もいませんでした。まして東欧の専門家はいませんでした。東欧については家庭で聞いたこともありませんでした。

父は理系ではありませんでしたが、父方には技術者が多くいました。その影響でしょうか、私も理系少年でした。将来は工学部を出て技師になることを夢見ていました。子どものころからラジオとか飛行機が大好きでした。将来は科学技術革命をやって日本の近代化に貢献するのだと意気込んでいました。かなり偏った人間で、小説とか歴史書とかは一切読んだことがありませんでした。

私は文庫本を開いたことがなく、新書なんて存在も知りませんでした。文庫本というのを知り、読み始めたのは高校に入ってからでした。そういう意味で精神的発達のバランスを欠いた少年時代でした。ただ、父親がサラリーマンだったので、通勤途中に『文藝春秋』という雑誌をいつも読んでいました。中学時代からときどきその月遅れのおこぼれを拾い、載っていた芥川賞の受賞作品などを読むことがありました。おかしいことです、日本文学はほとんど読んだことがなかったのに、芥川賞作品を読むなんて。おそらく文学鑑賞などまるでできなかったのだと思います。高校に入って四日市の都会部の方からやってきた連中と付き合うようになって、おまえなにを読んだかなどと言いつつ、だんだんと小説の世界が広がっていった気がします。

とくに外国文学、ロシア文学、フランス文学、英文学に傾倒しました。ロシアものではドストエフスキー、トルストイ、チェーホフ、ガルシンなどの主な作品はほとんど読みました。フランスものではスタンダール、ロマン・ロラン、アンドレ・ジイドなどを夢中で読みました。シェイクスピアは高校時代に祖父の書棚にあった坪内逍遙訳を読み通しました。

また、新聞を読むのが好きでした。今から思うと外電、外からのニュースを読むのが好きでした。『朝日新聞』に「スターリン死す」という大きな記事が一面に出たことを憶えています。あれは1953年、私が11歳で小学校5年生のときでした。

高校で自分が一番好きな科目は世界史でした。どういうものか日本史は嫌いでした。日本史と生物学を毛嫌いしていました。高校は理系でしたが、2年生のときに将来の進路について迷いが生じました。よく似た趣味の二つ上の兄が大学の工学部に進んでいました。私もすでに理系のコースに身をおいていましたが、このまま進んでよいかどうか迷いました。外電好き、世界史好き、外国文学好きなので、やはり外国に関わることがよいかなと思い、ひょっとして外交官になったらどうかと思いました。身内に外交官はまったくいませんでした。田舎でしたから無理ありませんが。その志望はようやく高校3年生になって固まりましたが、まったくあやふやでした。

——高校のときは三重県だったのでしょうか？ 同級生で、そういう考えをもっている人は多かったのでしょうか？

高校3年生までずっと三重県でした。今では市町村合併が進んで私の郷里は四日市市になりましたが、当時は四日市市ではなく、三重郡八郷村という周辺郡部でした。しかし、その近くに高校があって、そこに友人となる生徒が四日市市の中心部から通ってきました。その友人たちと知的虚栄心を張り合わせました。ただ将来外交官になろうなんて人間はいませんでした。たしか高校2年生で文系と理系に分かれましたが、私は理系に進み、文系の連中とはあまりつきあわなくなりました。理系でしたから私みたいに大学で文系に進んだのは多くなかったように思います。ただ、当時国立大学の入試は文系も理系も同じだったので、国立を受けるので理系に進んだというのをもいたと思います。しかし、法学部や文学部の連中との付き合いが生まれたのは高校というよりも大学からでした。

——当時は理系の方でも文学に親しんでいたのでしょうか？

当時はそうだったといってよいでしょう。理系は専門が細かいから、共通の話題になりません。共通の話になると、最近起きた事件、たとえば今ならウクライナ戦争のような話になります。文学では芥川龍之介も読みましたが、夏目漱石、倉田百三、武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉などの小説を読んで、感想を交わしていました。

——当時のソ連の工業が理系の人間を惹きつけていたのですか？ 社会主義に関する話が出たりしていましたか？

当時は情報がなく、社会主義国は政治的抑圧があるけれど科学技術は進んでいるというような話もあり聞きませんでした。東京大学の駒場〔教養学部〕に、物理の先生でロシア語が出来る先生が1人いて、驚いたことがあります。たしか玉木英彦先生でした。技術系のインテリに、科学技術が進んでいるからロシア語を学ばなきゃ、という人間はいたとして、ごく一握りだったと思います。私が東大に入学したときに、理系でロシア語を選ぼうなんていう人間はほとんどいなかったのではないのでしょうか。私は第二外国語がフランス語、第三外国語がドイツ語で、ロシア語は第四外国語として2年生から始めました。理系の人間は本当に1人もいなかったかもしれません。ただ、私の出席率が悪かったので、実は誰が出席していたのかも分からない状態でしたが（笑）。

いずれにせよ、私もロシア語をやる気になったのは大学に入ってからで、高校時代には考えたこ

ともありませんでした。

——高校時代の話伺いますと、旧制中学の文化を感じましたが、そういう名残はあったのでしょうか？

自分では感じませんでしたが、あったかも知れません。三重県にはナンバースクールというものはありませんでしたが、私が通った四日市高校は旧制富田中学で、戦前から地域で一番の進学校だったようです。バンカラで、人生粹に感じるという生徒が多くて、軟弱ではありませんでした（笑）。中学校2年生だったか、四日市高校が甲子園に初出場で優勝しました。進学校では珍しかったです。しかし、それからはまた鳴かず飛ばずに戻っています。

大学に入ったのは1960年で、運命の年でした。すぐ安保闘争に巻き込まれ、毎日デモに参加しました。左翼文献を読んだりしているうちに、外交官になって国に仕えるのが阿呆らしいと考えるようになりました。さればといって何になるかが決まったわけではありませんでした。現代史関係、外交史関係の書籍はよく読んだように思います。思想史関係の本も読むようになりました。とりあえず、当初の目的だった教養学科国際関係論分科に進みました。

教師は講師以上が江口朴郎（1911-89）、衛藤藩吉（1923-2007）、川田侃（1925-2008）、斉藤孝（1928-2011）の4人で、助手に百瀬宏（1932-）がいました。百瀬は間もなく北海道大学に赴任しましたが、学生時代はあまり付き合いがありませんでした。講師から上の4人の中から指導教員を選ぶことになっていました。実は本郷の社会科学研究所の教員からも選ぶことができたらしいのです。同級生だった南塚信吾君（後述）はそうしましたが、私はそのことを知りませんでした。

4人のうちで関心が自分に一番近いと思ったのが斉藤孝先生でしたので、迷わず指導教員に選びました。斉藤先生は東大西洋史出身で、歴史学への思い入れが非常に深かったです。私はもちろんその影響を受けましたが、斉藤先生自身は学生になるべく社会科学の諸分野に幅広く関心をもたせるという方針をとりました。われわれはそのゼミでパレート、モスカ、ソレル、マンハイム、ジグムント・ノイマン、フランツ・ノイマンなどを読まされました。後になって考えてみると、狭い意味での歴史家の書は一つもありませんでした。もう一つ、アメリカの社会科学書もありませんでした。みなドイツ、フランス、イタリア、イギリスなどヨーロッパ系でした。

私個人が斉藤ゼミで最初にあてがわれた書は、現代ドイツの政治学者カール・ディートリヒ・ブラッハー（Karl D. Bracher, 1922-2016）『ワイマール共和国の解体』という797頁のドイツ語の大著でした¹。毎日朝から晩までこの本ばかり読んで、3ヶ月くらいかかりました。何のために読んだのか分かりませんでした。少なくとも東欧研究にはほとんど役に立ちませんでした。ずいぶんのちになって早

¹ Karl Dietrich Bracher, *Die Auflösung der Weimarer Republik*, Stuttgart 1957.

稲田大学で比較政治学を講義するようになったときにはじめて役立ちました。リンス (Juan José Linz, 1926-2013) という比較政治学者がいますが、リンスはブラッハーの影響を受けていました。私はリンスがすごく好きで、ブラッハーを読んだことに感謝しています。同じころ、個人的な趣味でクローチェとか、カーとか、ベルンハイムとか、コリングウッドとかいう歴史哲学書を読み漁りました。いずれも東欧研究とはまったく関係がありませんでした。友人だった上村忠男君の影響もあったと思います。

研究対象地域については遍歴があります。指導教員の影響もあってスペイン、次いでドイツ、中ソ論争の関係で中国、そしてロシアに関心を持ちました。しかし、卒業論文にはたまたま図書館でドイツ語の史料が見つかったので、バルト三国、とくにラトヴィアに対する第一次世界大戦後の連合国による干渉戦争を取り上げました。大戦で敗北したドイツ軍がバルト地域に残っていたので、独立したばかりのバルト諸国の軍隊と連合国の助けを得て戦ったという事件ですが、非常に面白くてわれながらいいテーマを見つけたものだと思います。ただ深い思い入れはなく、あくまで卒論を書くためのテーマでした。

卒論を提出したあとも何をすべきかを決めることができませんでした。すでに就職活動の時期は過ぎていました。わざと2単位残して留年しました。留年1年目の7月に指導教員に相談して、「じつは困っているんですが」と打ち明けると、「お前は正義感が強いから大学院に来たら」と勧められて、ようやく決心がつけました。進んで学者になるとか、大学院に進むという考えはありませんでした。かなりのんきというか、不決断な性格だったようです。

留年した1年間はひたすら図書館に籠もって好きな本を読みました。取るべき単位は取っていたので本来授業に出る必要はありませんでしたが、ひょっとして食い潰したらどうしようと思って、英語教師にでもなろうと考えて教職単位を取りました。中高の英語教師の免状をとりましたが、今日に至るまでそれを使ったことがありません。もったいないことをしたと思います（笑）。

そうした中でポーランドを研究対象に選ぶことを決めました。なぜポーランドか。のちに何度も聞かれる質問で、とくにポーランドにいったときによく「なぜわれわれの国を選んだのか」を聞かれましたが、正直言ってよく分かりませんでした。憶えているのは現代史研究会という研究会に行っても、実質上はドイツ史研究会で専門的な話をしていて、ナチの押収文書をみんなが夢中になって読んでいて、私にとっては面白くなくて敬遠しがちでした。ロシア史研究会という研究会もオタクの集まりで、私も好きでしたが、ロシア革命研究の話をはてしなく展開していて、こんな先輩に囲まれて勉強するのは辛いと思ったことがありました。それで誰もいないところに行こうと思ってポーランドを選びましたが、正直言って私の人生の最大の過ちだと思っています。厳しい先輩にしごかれた方がよいに決まっています。

もう一つの理由は、なんとなくポーランドの歴史が日本と似ていると思ったことです。それはシュラフタと武士の社会的地位が似ているなど思ったことです。これは現在では非常に多くの限定をつ

けなければいけないと思いますが、当時の限られた知識で言えば、例えばロシアや中国には武士に該当する身分が存在しませんでした。それに対してポーランドには存在しました。日本とポーランドは比較可能なのではないか、と思ったということです。そんなことをポーランド人に言うと笑われますが。

第三の理由は当時ローザ・ルクセンブルクに関心を持ったことです。ローザはドイツの革命家として知られていますが、私は彼女のポーランドの革命家としての側面を見つけ出したいと思いました。おそらく多くのポーランド人研究者の目から見ると無理な観点でした。なにしろローザはポーランドの独立を否定したのですから。もちろんポーランドにもローザのポーランド的側面に注目する研究者は少なからずいましたが、大部分の研究者はむしろ彼女の非ポーランド的な側面に注意を奪われていました。少なくとも彼女をもってポーランドを代表させることには抵抗を感じていました。ただしローザが価値ある人間であるということは、ほとんどのポーランドの良識ある知識人が同意します。いずれにせよ一般のポーランド人にとり、彼女はまずユダヤ人であり、ロシアの革命党との連帯を強調する革命家でした。実際にはポリシェヴィズムに抵抗していますが、それは一般のポーランド人からは見えませんでした。最後に、そしておそらくもっとも重要なことに、ポーランド人が気に食わないのは、彼女がドイツの革命家になったということです。私はそういうことを知りつつ、あえてポーランドの革命家としての側面に注目したいと思いました。ひょっとするとそのために偏った、やや「ユダヤ的」な見方をするようになったのかもしれませんが。

語学的には学部時代に英仏独露とやってきたので、ポーランド語は大学院に入ってからやればよいと思いました。英仏独の言語にはすでに学部時代にかなり自信がありました。ロシア語は単位を取りましたが、すでに2年、3年となって忙しくなっていたので、ほとんど授業に出ず、事実上独学でした。ロシア語自体にはあまり抵抗を感じませんでした。結局最後まで中途半端なままで終わったように思います。ポーランド語についてはまったく予想が付きませんでした。その習得がいかに多くの時間と労力を奪うものであるかを私は大学院に入ってから始めて知ることになります。

——先生がシュラフタを知ったきっかけはあったのでしょうか。どういった外国語文献をお読みになったかご記憶でしょうか。この当時、研究者や学生がポーランドのことを調べるとき、どういった文献にあたられたか興味があります。

私もちょっと記憶にないです。ポーランド研究に入ったきっかけですから、ポーランド史、とくにシュラフタ問題に詳しくは知りません。よくあるように何も知らずにこの道に入り、そのあとで勉強していろいろ知りました。入ったときはおそらく直感的にポーランド人はその社会的な振る舞いが日本人に近いなと思ったのです。ブルジョワジーがいなかったというか、弱かったことがポーラン

ド史の特徴ですね。シュラフタの社会的威信が圧倒的だった、と。それが町民と武士の関係ということで日本に近いな、と。ただポーランドと比べると、日本は明治維新後にずいぶん変わったと思います。明治維新は下級武士による革命ということで、明治時代は武士が評価されて、皆が武士になりたいと思い、武士のエートスを日本人は我が物にしてしまいました。ただ現実の武士は明治維新後に没落しましたね。私の父方の先祖もそうですが。ただエートスだけが尊ばれて第二次世界大戦に突っ込んでいく、ということです。明治以降は町人出身者が活躍します。あとから気づいたのですが、封建階級の没落と商人階級の台頭という意味では、日本史はポーランドよりも一歩先んじているなという気がしました。しかし、一般的な印象としては、いつまでも封建階級、支配階級が頑張っているという点で日本とポーランドは似ているな、と思ったのです。

私の父親は封建階級出身でしたが、農民の家に婿入りして妻の苗字を名乗りました。父の父、つまり祖父は浄土宗の住職の養子となっています。それから数えると三代の間に三回も苗字が変わっているのです。最初は勘定奉行の「橋爪」、次に浄土宗の住職の「神野」、最後に農村の商人の「伊東」。なお、浄土宗は武士の宗教でしたので、その住職の養子になったということはまだ武士意識を捨てていなかったのでしょうね。しかし、簡単に苗字を変えて、身分を変えていますので、身分についての誇りはもう何も残っていなかったと思います。それを面白いと思いました。日本では「侍」は没落したのだと思いました。

ポーランドにいくと、先祖はシュラフタだったと誇りをもって言う人が多いです。後から知ったのですが、中世に出た『ポーランド紋章一覧』(*Herbarz Polski*)があって、そこに書き込まれてないと偽者だっていうのです。ただ 12、13 世紀に出た本なので、だんだんと変わっていくのですが。動かしがたい証拠として、自分の先祖がそこに載っていると誇らしげに語る人が多いです。ちょっと驚きました。

2. 学生・院生時代（1960 年代）の社会的背景——日本に伝えられた「東側」の像

「東側」諸国、つまり社会主義国は当時の日本では神話化されていました。東側では社会主義革命が起きて、社会的公正が実現して、何もかもうまくいっていると信じる人々が多かったです。それは左翼ばかりではなく右翼においても「残念ながら」そうだと考える人が多かったです。ロシアについてはすでに多くの歪み、誤謬、弾圧、暴力、それから来る不公正、無駄、不経済、生活水準の伸び悩みなどがあると伝えられていましたが、直接の目撃者、体験者は少なかったです。日本人の大多数が社会主義国について直接伝え聞いていたのは、おそらく中国〔中華人民共和国〕のことでしょう。1960 年代初めまで、中国についてネガティブな話はほとんど伝えられませんでした。北朝鮮〔朝鮮民主主義人民共和国〕についても伝えられませんでした。中国や北朝鮮でうまくいっているらしいから、ソ連や東欧諸国で多少の過ちが犯されたとしても、それほどひどくはないだろうというイメージでした。

私は保守的な農村出身で、郷里では身近にまったく左翼がいませんでした。共産党員といえどもむしろ恐怖の対象で、何か起きればテロの対象となるおそれもありました。しかし、そのような保守的な雰囲気の中でも資本主義はどこか間違っている、将来は必ず社会主義となると信じる人が多かったのです。私の父親も典型的に保守的な会社員でしたが、その父でさえも、社会主義の方が正しい、日本も将来は必ず社会主義になると信じていました。

高校時代に一つ思い出があるのは、たしか高校 2 年生の時に、京都大学に行った先輩が帰省して読書会を開いてくれました。読んだ本はマルクスとエンゲルスの『共産党宣言』でした。これには非常につよい感銘を受けました。もう一つ、レーニンの『国家と革命』を勧められて 1 人で本を買って読みましたが、これはよく分かりませんでした。なにか激しい言葉で論争しているのですが、なにを言い争っているのか分かりませんでした。大学に入って以後も、研究者となっても何度か読みなおすことになりますが、最終的にはどうも間違ったことが書いてあるという結論に至りました（笑）。

たしかに先輩のオルグはありましたが、一般的には非常に保守的な雰囲気の中で育って、上京して、安保闘争のただ中に放り込まれました。私も毎日デモに参加しました。社会主義に賛成だったからではなく、日米安保条約に反対だったからです。しかし、私は反米主義者だったわけでもありません。農村にいるころからほとんどアメリカ、とくにマッカーサーに憧れていました。アメリカこそは日本を封建的な暗黒から救い出してくれる、私をあの因習に満ちた農村社会から助け出してくれると思い込んでいました。しかし、日米安保条約は間違っていると思いました。おそらく戦後平和主義に影響されていたからでしょう。私は社会主義がなんであるかがまだ分かりませんでした。

なんとなく現在の問題を解決してくれるイデオロギーだと思っていました。学生運動の指導者はほとんど社会主義者でした。ただ、大学に入ってから少なくとも二つの種類の社会主義者がいることに気がつきました。一つは当時「代々木」と呼ばれた共産党員で、もう一つは共産党から分離したブントと呼ばれる新左翼のグループでした。おそらくこれに第三の、最大のグループとして社会党員がいましたが、ここではそれは脇に置くことにします。両者の分裂は私が大学に入った2年ほど前に起きましたが、ちょうど1年前に東大の学生自治会を新左翼が牛耳るようになったので、われわれは新左翼²のアジテーションにフルに晒される最初の世代だったということが出来ます。

新左翼も社会主義を信じていましたが、日本がアメリカに従属した帝国主義か、それとも独立した帝国主義かということで、日本共産党と激しく争いました。日本共産党は前者の立場、新左翼は後者の立場でした。新左翼は共産党を民族主義的だと罵倒しました。というわけで、新左翼に影響された私はここでも反米主義的な傾向からは免れることになりました。ただ、相変わらず社会主義国は「平和勢力」だと信じていました。この間にいろいろ本を読んだり、議論したりしているうちに社会主義国が一方的に平和主義的だという主張はおかしいと考えるようになりました。それはやはり曲がりなりにも国際関係論という専門を選択して、外交史や外交政策を勉強するようになったからだと思います。

また、ちょうどこの頃から中ソ論争が顕在化して、社会主義論が分化するようになりました。最初はソ連の社会主義と中国の社会主義のどちらが正しいかという粗っぽい議論でした（たしか国際関係論——学部だったか大学院だったかたしかな記憶はありませんが——の自治会主催で行われた討論会のテーマ）が、そのうちに社会主義国の間にも相違があるらしいという認識が広がってきました。その中で東欧諸国の社会主義に対するロマンティックな憧憬のような動きもありました。これはユーロ Kommunismus に関する論争と絡んでいました。

なお、私が大学に入る少し前に在日朝鮮人の帰還事業が始まり、在学中もその後もずっと続きました。北朝鮮については当時あまり情報がありませんでした。体制の実態について認識が深まったのはずっとあとになってからでした。

私の社会主義認識はそれほど深まったわけではありませんが、理念としての社会主義と体制としての社会主義は区別するべきで、少なくとも国際政治で社会主義国だけが「平和勢力」であるということはある得ないという考えが学部時代に私の中に定着しました。

他方で、この頃ベトナム戦争が深刻化しました。私が大学に入った1960年には南ベトナム駐留米軍はわずかに数百人規模で、たいしたことではありませんでした。1964年8月にトンキン湾事件が起きて、米軍が大量に駐留し、北爆を行って大規模な戦争となりました。北ベトナムは社会主

² 1950年代末に主として共産党内から起こってきた既成左翼に批判的なグループ。共産主義者同盟（通称「ブント」）、革命的共産主義者同盟（通称「革共同」、のちに「革マル」）など。

義国でしたが、日本の世論は社会主義か否かということとは関係なく、ほとんど一致してベトナム介入に反対でした。私も強くベトナム反戦、つまり米国の介入反対の立場に立ちました。デモにも出かけたことがあります。それはちょうど学部から大学院に進学するころでした。

3. 戦後日本における東欧研究と大学院時代

私が大学院に入ったのは1965年で、ポーランド研究を始めようと思ったのもその頃からでした。修士論文を提出したのが1967年、そして西ドイツに留学したのが1968年です。こう見ると、私が日本の東欧研究の伝統に触れた期間は本当に短かったです。事実上なかったといってもよいほどです。私は日本の東欧研究を網羅的に読んだことがありません。それほど数が多いわけではないので、読むべきだったと思います。戦前の文献を二つ、三つ読んだ覚えがありますが、書誌的なデータを思い起こすことができません。しかし、真っ先に思い浮かべるのはやはり梅田良忠（1900-61）の研究でしょう。その初版は私が大学に入った1960年に出ていますが、当時私は東欧にまったく関心がありませんでした。手元にある版は1963年12月の第6版です。おそらく大学4年生のときに買ったのでしょう。この頃に私の東欧への関心が生まれたのかも知れません。なお、梅田良忠については最近伝記が出ています³。それによると梅田は波瀾万丈の生涯だったようです。学究生活だけではなく、宗教活動、スパイ活動、ジャーナリスト活動、女性遍歴でも際立っていました。

もう1人、私が東欧について非常に教わったのは鳥山成人（1921-2005）先生です。彼は札幌生まれですが、父の職業の関係で台北の中学・高校を出て、1943年東大文学部西洋史学科卒ですから、日本の東欧史研究者には珍しい戦前派だといってよいでしょう。わが国ではロシア史研究者として知られていますが、東欧諸国の歴史にもたいへん明るい人でした。ポーランド語、ドイツ語の文献も読みこなしていました。私はドイツ留学中に向こうのロシア研究者から、日本から招くことのできるロシア史研究者がいたら推薦してほしいと頼まれて、何も知りませんでした。その名声を聞いていたので、鳥山成人先生を推薦し、ベルリンでの学会の通訳を買って出ました。帰国してから同じ大学に勤め、いろいろ教わりました。彼の書いたものはほとんど読みました。彼は原史料を読むことができるような環境では育ちませんでしたので、史学史研究が中心でした。史学史を中心として緻密にロシア史、東欧史を読み解いています。外国語を話したり、書いたりすることはできませんが、正確な読解力の持ち主で、学問への態度において多くを教えられました。私はすでに北海道大学スラブ研究センター（当時。以下、スラ研）に就職していましたが、実際には鳥山先生の下でまだ修学過程にあったといってもよいでしょう。

ロシア史研究と東欧史研究を比較すると、日本の東欧史研究はやはり研究の歴史が浅いように思います。ロシア研究は文学研究から始まっていますが、そのスタートはすでに明治時代にあります。戦前戦中戦後、ロシアとの連絡がとりにくかった時代にもロシア研究は続けられました。ロシア研究者が学問研究のためにロシアに留学を許されるようになったのは、東欧研究者とあまり変わりませ

³ 梅田良忠『東欧史』山川出版社、1958年；梅原季哉『ポーランドに殉じた禅僧梅田良忠』平凡社、2014年。

ん、というかむしろ遅れたように思います。東欧諸国の方が、自由化が少し早かったのです。

日本におけるハプスブルク研究ということであれば、東欧研究もロシア史研究とほとんど同じぐらい古くまで遡ることができるかもしれません。おそらく明治時代には研究が始まっているのではないのでしょうか。北大時代の先輩同僚として矢田俊隆⁴先生という研究者がいます。東欧研究といってもドイツ語を話す東欧の研究で、学問的にはやや縁遠かったですが、その著作からは教えを受けました。

日本で本格的な東欧研究が始まったのは、やはり東欧諸国への留学、あるいは東欧研究のために欧米諸国への留学が可能となって以降でしょう。しかし、周知の事情で東欧諸国への日本人の留学は長い間阻まれてきました。留学できたのは偶然的なつながりがあってソ連・東欧諸国に留学できた人々です。戦後の状況を考えると、それは共産党か、あるいは左翼政党、労働組合などの役員か、あるいはその推薦を受けて留学した人々でした。そういう人々がソ連をはじめとして東欧諸国にそれぞれ数人から数十人いました。研究者というには単に留学しただけではなく留学して一定の研究の成果を収める必要があったでしょう。とすると、彼らが1960年代の初めに留学したとして一定の成果を収めて帰国できたのは1960年代の後半となります。伊東は梅田良忠の長男、芳穂氏と後年親交を結ぶことになりますが、彼が父親の遺言でポーランドに渡ったのが1963年、14歳の中学生のときでした。その頃、ワルシャワに数名の日本人がいて、親しくつきあいました。この世代には阪東宏（1926-）、鈴木輝二（1934-）、鶴岡重成（1935-）などがいます。阪東先生は次に述べるように伊東が大学で教わった講師の1人です。鈴木は比較法学者で、1961～65年にワルシャワ大学に留学して1966年米国インディアナ大学研究員を経て、香川大学、東海大学、ワルシャワ・レオン・コジミンスキ大学（Akademia Leona Koźmińskiego w Warszawie）教授を歴任しました。鈴木とはようやく晩年になって親しくなりました。鶴岡は経済学者で、ランゲやブルスの翻訳者です。伊東はまだ知己を得ていません。

梅田、鳥山、矢田のような例外を除けば、この世代が戦後第一期の東欧研究者を形成したことになります。しかし、（研究者の）リクルート源が限られていたし、現地での研究、教育にも制限があったのでそれほど豊かな実りは齎さなかったように思います。傾向としては、日本から現地に赴いた研究者の方が現地の研究者自身よりもよりオーソドックなマルクス主義イデオロギーに拘束されていたという印象があります。鈴木はその点で米国にも留学しており、例外的です。

年齢的にはこのグループに入りますが、別の系統の研究者として佐藤経明（1925-2014）がいます。戦争中結核を病んで、瀬戸内海の島で療養し、戦後東大経済学部に入りました。頭が切れ、

⁴ 矢田俊隆（1915-2000）。三重県桑名生まれ、1938年東京大学文学部西洋史学科卒、1950年北海道大学法経学部教授。主著『ハプスブルク帝国史研究 中欧多民族国家の解体過程』（岩波書店、1977年）。伊東と同郷の人である。桑名に矢田城という城があって、先祖はその城主だったが、のちに浄土真宗の僧侶となり、法盛寺という大寺の住職となった。法盛寺はたまたま伊東家の菩提寺で、住職に矢田家の話を聞くとよく知っていることが分かって驚いたことがある。浄土真宗は一般に農民の宗教だと思われているが、実は武家にも信者がいたようである。

語学に堪能な人で留学もせずに英語、ドイツ語、ロシア語の会話ができました。左翼運動とソ連大使館の連絡役をしていたという人もいます。ようやくフルシチョフ末期になってモスクワに留学し、東欧や西欧諸国の共産党員と交流しました。それぞれ後日、東欧自由化、ユーロcommunizムの担い手となった人々です。ソ連・東欧諸国の内政に精通していて、とくに経済情勢の客観的な分析を心がけました。私は後年親しくさせていただきました。

次に大学院時代での勉強について少し話したいと思います。ご承知のように、日本の大学院修士課程は授業科目（コース）と論文指導から成り立っています。それ以外にも授業外での研究会や私的な研究があります。もちろん飲み会もありました（笑）。

コースについてははっきりと憶えていません。どういう授業に出たのかは、記憶が消えています。いくつか記憶しているのがあります。まず折原浩⁵先生のゼミです。マックス・ウェーバーを読みました。これは非常に面白かったです。それまでもウェーバーを少し読んでいましたが、本格的に読むようになったのはそれ以後です。ウェーバーの読解で非常にたくさんの時間を取られるようになりました。まあ、仕方がないのですが（笑）。折原先生はウェーバーの訓詁学者でした。昔の儒学者が孔子のテキストを細かい字句に至るまで丸暗記するように読んでその解釈について争ったように、折原先生はウェーバーのテキストを一字一句非常に丁寧に、正確に訳出することに拘りました。私自身は流し読みが好きだったものですから、かなりいい加減な読み方をしていたのですが、折原先生は厳格そのものでした。それでいろいろなことを教わりました。

折原先生の訳書の一つに、ラインハルト・ベンディクス著『マックス・ウェーバー——その学問の全体像』（中央公論社、1966年）（Reinhard Bendix, *Max Weber: An Intellectual Portrait*, Heinemann 1960）という本があります。著者は社会学者で、産業社会学の専門家です。ベルリン生まれのユダヤ人で、豊かな実業家の家に生まれたようです。ナチスが政権をとったあと、アメリカに亡命し、シカゴ大学の教授となりました⁶。この本はウェーバーの学問の全体をコンパクトにまとめ上げた書で、非常によくできています。私はそれを読んでウェーバーを全部読んだ気になったほどでした。偶然ですが、ベルリンに留学していたときにある研究会でベンディクスと知りあう機会がありました。そのときに折原先生の話をしたときに、彼はこう言いました。「覚えている、覚えている、折原はよく知っているとも。あいつは何語もまともにできなかった。英語もドイツ語もほとんどできなかった。通訳が必要なほどだった。心配になったが、ウェーバーの話になると、折原は何でも知っていることが判った。本当に細かいところまで、どの著作の何ページになにが書いてあるかということまで、実によく知っていた。驚いた。訳者としては完璧だった。」

⁵ 折原浩 (1935-)。1958年東京大学文学部社会学科卒、1965年東京大学教養学部助教授、1968~69年東大紛争で学生側に加担して有名となる。主著『危機における人間と学問——マージナル・マンの理論とウェーバー像の変貌』未来社、1969年。

⁶ ベンディクスは博士号の取得はシカゴ大学であったが、教鞭をとったのはコロラド大学とカリフォルニア大学バークレー校。

私も折原先生には非常に強い印象を受けました。以後ウェーバーを好んで読むようになりました。それまでのように流し読みするのではなく、一字一句、一行一行注意力を集中して読むようになりました。ウェーバーは歴史知識がメチャクチャに豊富で、歴史について学ぶことも多かったのですが、実際には彼は歴史についての知識を使って社会を分析したのです。つまり、社会学や政治学の立場です。私はその後歴史学と政治学の狭間を生きることになりますが、そういう意味でウェーバーを知ったことはとてもためになりました。

それから谷嶋喬四郎⁷先生。この人は一般にはあまり知られていませんが、社会思想史の専門家です。谷嶋先生の下で、ドイツ語でヘーゲルの『歴史哲学』を読みました。多くのヘーゲルの著作はヘーゲルが書いたものというよりも、講義したもので、それを学生が筆記してのちに発表されました。『歴史哲学』は典型的です。そのおかげで、例外的に読みやすくなっています。これを導入として、その他のヘーゲルの著作も開くようになりました。たいへん勉強になりました。あとは、谷嶋先生の下でマンハイムの『イデオロギーとユートピア』や『保守的思考』も読みました。これもドイツ語で読んだように思いますが、いまでも役に立っています。

こうした授業でいつも一緒だったのは上村忠男⁸君でした。実は出席者は彼と私の2人だけでした(笑)。ウェーバーの授業にはあと1人途中で潜り込んできたのがいました。われわれはいまだにその人物の正体を知らないのですが、あるとき「ちょっと授業の端っこに加えてください」と言って入ってきました。何者かはわからないのですが、一緒にやると途中から話し始めて、ものすごくウェーバーに詳しいことが判りました。われわれの水準をはるかに抜いているような、ウェーバー学に凝っているというか、心酔しているような感じの学生でした。二、三回出てきて、またパッと消えてしまいました。今は何をしているのかはわかりませんが、もしかしたら、その後日本で有名なウェーバー学者になったのかもしれない。ウェーバーのドイツ語はなかなか読めないのですが、彼は学生でありながらそれを楽々と読みこなしている感じだったので、非常に強く印象に残っています。

上村忠男君はヨーロッパ思想史やイタリア社会運動史について非常に明るかったです。彼からも多くを学ぶことができました。イタリア語もできましたが、ドイツ語もよくできました。あとはラテン語も読んでいますし、フランス語も読んでいます。彼がその後発表した著作はいくつか読んでいます。私は学生時代からずっと彼の話を聞かされて毎日を送ったものですから、もう嫌というほど聞かされて、いま彼が書いているものを読むと、なんか昔聞いたようなことが書いてあるのです。早熟というか、学生時代から彼は同じ考え方なのです。それをずーっと発展させていろいろな著作にしているなという気がしています。羨ましい気もします。ものすごい才能の持ち主です。

⁷ 谷嶋喬四郎(1929-)。1953年東京大学文学部倫理学科卒、1963年東京大学教養学部助教授。主著『弁証法の社会思想史的考察——ヘーゲル・マルクス・ウェーバー』東京大学出版会、1972年。

⁸ 上村忠男(1941-)。1965年東京大学教養学部教養学科卒、東京外国語大学で教鞭を執る。主著『ヴィーコの懷疑』筑摩書房、1988年。

ポーランド現代史を自分のテーマにしようと思っていたのですが、駒場にはそれを専門とする教師がいませんでした。ちょうどこのころ、(前述の) 阪東宏先生がポーランド留学から戻ってきました。東大の西洋史で、私の師匠である斉藤孝先生の2年上の先輩でした。彼は大学を卒業して数年高校の歴史教師をやって、そのあとポーランドに留学する機会を得て留学しました。1960年代の半ばに帰国して、当面就職先がなかったのと、そこに私というポーランドに関心をもつ学生が現れたという事情が重なって、斉藤先生が講師として阪東先生を招いた方がよいと判断して、非常勤講師として招いてくれたのだと思います。

阪東先生の受講生は3人ぐらいだったと思います。1人は宮島直機君(東大法学部政治学科→中央大法学部助手)がいたと思います。宮島君は東大の法学部出身で、修士号を取ってすぐに中央大学の助手になりました。当時、阪東先生はたしか練馬区石神井台にお住まいで、宮島君と一緒に自宅に招いていただいて、奥様の手料理のご馳走に与りました。学生の身分で、先生の家を招いていただけるというのは夢のような話で、たいへん有り難く思いました。阪東先生の授業にはその後修士論文の準備、留学準備で忙しくなって連絡が途絶えたのですが、研究生の1人で1968年に入学してきた人がいて、阪東先生の講義に出たと言っていました。受講生は何人ぐらいだったかと聞いたら、1人だったと言っていました。ですので、私が出た後はあまり受講生がいなかったのではないかという気がします。

阪東先生は高校で教えていたけれども大学で教えるのは初めてで、講義はそれほどうまくは言えなかったように思います。それになんとなく共産党の公式的な立場を代表している気がしました。共産党と言えば、駒場では非常に影響力がありました。江口朴郎先生は黨員でなかったとしても非常に近い立場にありました。斉藤先生もそれに近かったですが、いずれも非常にオープンで、共産党についても批判的でした。それを学生の前でも公然と口にしていました。ただ、阪東先生はそうではありませんでした。講義内容は、私の記憶では、1863～64年の一月蜂起と農奴解放の話でした。それはのちに『ポーランド革命史研究——一月蜂起における指導と農民』(青木書店、1968年)として刊行されますが、内容はほとんどシュテファン・キューニェヴィチというワルシャワ大学での彼の指導教授の本の翻訳でした。しかし、日本で初めてのポーランド史研究ということで、価値の高い著作でした。

このほかに語学の授業がありました。ロシア語教師は木村彰一(1915-86)先生でした。木村先生はロシア文学の翻訳者でもあります。父君がドイツ語辞典の編者という有名な語学一族の一人です。私は木村先生からロシア語とポーランド語を教わりました。たまたまこの頃、東大とワルシャワ大との間で教員交換⁹が始まって、木村先生はそれで1年間ワルシャワ大学に派遣されました。帰国したばかりでしたので、ポーランド語も流暢でした。1年現地で過ごすともうペラペラと話せるよ

⁹ 東京大学とワルシャワ大学との国際交流協定は現在も続いている(東大のサイトによれば1978年から全学協定)。

うな人でした。出席者はいずれも3人ぐらいだったと思います。

まずロシア語の授業ですが、なんとプーシュキンの詩でした。文学と関係のない学生にいきなりプーシュキンの詩を読ませるなんて、私はちょっと乱暴じゃないかと思いました。しかも私は、先ほど話したように、まともにロシア語を勉強していなかったのです。ほとんど一度も授業に出ずに単位だけ取ったという横着者でした。そういう私にとっては木村先生の授業はものすごく負担でした。でも、熱心に準備をして、その時間に割り当てられたプーシュキンの詩を誦んじるようにして出席したものです。それでもダメでした（笑）。大いに叱責されました（笑）。頭が上がりませんでした。だから、ロシア語の方の出席者は憶えていません。たぶん私以外では1人か2人だったのではないのでしょうか。まったく贅沢な授業でした。

ポーランド語は、なんと当時出たばかりの南極探検のテキストを読むことでした。タイトルなどはもう全然覚えていません。私にはチンプンカンプンでした。私はまだポーランド語の勉強を始めていなかったで、文法も語彙もわからなくて、苦しかったです。大学院に入ってから *Teach Yourself Polish* というよく知られたポーランド語入門書があって、それで自習していたのですが、ポーランド語がこんなに複雑だとは知りませんでした。それを使いこなせるようになるなんて一生かかってもないだろうと思いました。最初は本当に絶望するような毎日でした。私はそれから始めて4年ぐらい、ドイツに行ってもポーランド語を勉強していましたから、それをあわせると5年くらいやりましたが、絶望の連続でした。他の言語はだいたいモノにしましたが、ポーランド語だけは一生モノになるまいと思いました。

ポーランド語の授業には2人出席者がいました。1人は井上紘一¹⁰君です。文化人類学者で、後にスラ研で一緒になりました。井上君は日比谷高校から東京外語のロシア語科に進んで、学士入学で東大に入ってきました。非常に良くできる人物で、ロシア語も英語もできました。そのあとフィンランド語とラップランド語もできるようになりました。ロシア語は100%できましたから、それからポーランド語に移るのは容易だったのでしょうか。もう1人、謝邦子さんという女子学生がいました。謝さんは、私にとっていまだに謎の人物ですが、たしか父君が台湾系の実業人ということでした。井上という苗字の日本人の女性と結婚したので、井上邦子を名乗ることもありました。しかし、母君との関係はうまく行かず、台湾人であることも日本人であることもいやになって、ポーランド語を夢中になって勉強するようになったという風変わりな経歴の人でした。われわれのクラスを終えてから姿を消しましたが、ポーランドに行ったということを伝え聞きました。しかし、ポーランドに行ったら、間接的にポーランドにいるという情報だけ耳にすることがありましたが、何をするようになったのかは知りません。ポーランド人の男性と結婚したというわけでもないようです。2人の語学の天

¹⁰ 井上紘一(1940-)。東京生まれ、1964年東京外国語大学ロシア語科卒、1966年東京大学教養学部教養学科地理・文化人類学課程卒、同年東京大学大学院社会学研究科文化人類学課程入学、1975年北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手、1983年中部大学国際関係学部助教授、1984年同教授、1994年北海道大学スラブ研究センター教授。

才に挟まれて、まったくの劣等生の私は非常に肩身が狭い思いをしました。自分がポーランド語ができるなんて日は永久に来ないのではないかと思ったほどに絶望的な気分でした。

あとは、学外でもポーランド語を勉強しようと思って、宮島君とともにポーランド大使館の文化アタッシェだったボロヴィエツ (Marcin Borowiec) と交換教授をやりました。いつも中目黒の大使館に行ってやったのですが、これも失敗でした。ボロヴィエツ自身は立派な人で、欧州語は何語でもできる感じの語学の達人でした。奥さんがロシア人だったのでロシア語もできましたが、日本語はダメでした。まずいことに、われわれは当時流行していた丸山眞男の『日本の思想』がいいんじゃないかと言ってテキストに指定したのですが、ボロヴィエツは丸山を一言も理解できなかったようです。まあ、今から考えると日本の初学者が丸山を読めなかったのは自然ですが、われわれも（ときどき英語を使いながら）『日本の思想』の内容を説明しようとしてもうまく説明できませんでした（笑）。これには苦勞しました。2人で一生懸命になって翻訳しながら、いや翻訳というよりもボロヴィエツに理解させようとするのですけども、どうにも理解してくれませんでした。なので、ポーランド語の授業としては全く役に立ちませんでした。まったくもって時間の浪費でした。ボロヴィエツはその後ポーランドに帰って、奥さんと離婚して、間もなく亡くなりました。

ロシア語も力不足を感じていました。ほとんど授業に出たことがなく、まともなテキストを読んだこともありませんでした。先ほどのプーシュキンの詩ではないですけど、本当に苦勞しました。それで宮島君からオファーがあって、中央大学法学部の池庄司敬信先生（政治思想史）という思想史、ロシア思想史の専門家がいたので、テキストを読むのを指導してもらうために、1週間に一度、当時お茶の水にあった中央大学校舎に通いました。まともにロシア語を読んだのは初めての経験でした。これと先のプーシュキンの詩ぐらいですかね、私が他人からロシア語を読むのを学んだ機会は。あとは全部自習でした。

あと、これは日本人に話すと驚かれて、自慢話だろうと思われるのですが、後学の人々の参考のために話します。スラ研に着任してロシア語ができないのは申し訳ないと思って、私は日露研究者交流協定に基づいて10ヶ月間モスクワに行きました。そうしたら、最初の日からロシア語が出てきました。自分でもこんなはずはないと思うぐらいです。空港から、迎えに来たロシア人の学生と、ロシア語でペラペラと話せました。自分でもビックリしてしまいました。それから3ヶ月ぐらいして通訳を買って出たりしたこともあります。講演をしたこともあります。それで帰るころにはロシア語はほとんど不自由しなくなったような感じがしました。

なぜできたのかというと、結局のところ、すでにドイツ語でものを考える能力が身についていたからだと思います。ドイツ語からポーランド語に移って、今度はポーランド語でものを考えるようになりました。その体験があって、それからロシアに行くと、ロシア語はものすごく簡単でした。ですからヨーロッパ人が何ヶ国語も話せるのはすごいと驚きますが、実はあれは何でもないことなのだと思います。

す。ヨーロッパ語は一つではなく、同時にいくつか勉強した方が経済的でよいとつくづく思います。私がポーランド語でたいへん苦勞した話をしましたが、後学の人がそれで挫けてはいけないと思ってこの話をした次第です。

ただ、それにもかかわらず、ロシア語の知識はいまだに足りないなと思います。ロシア語はまともに勉強したことがありません。文法書を読んだこともないので、いまだに語彙、格変化、イントネーション、構文などを間違えます。ただ、会話だけは比較的楽です。

研究会ですが、学内外でいろいろ組織されていました。私が通ったのは和田春樹（1938-）さんが指導するロシア史研究会、それから、西川正雄（1933-2008）さんが指導していた現代史研究会、それに駒場の国際関係論研究会の三つでした。最後の国際関係論研究会は、当時は仲間の話し合いみたいな感じで、研究会のようではなかったです。ロシア史研究会とは今でも付き合いがあります。いまだに通っています。現代史研究会とは、長い付き合いですが、さすがに札幌に来てからはほとんど会合に出られなくなったので、ある時に脱会しました。東欧史研究会はまだなかったです。

東大駒場には当時、ポーランド現代史に関心を持つ学生が結構いました。私のいくつか上の学年に戸田三三冬さんがいました。父君が33歳の年の冬に生まれたというので、その名前となったという話でした。日本女子大学から入ってきました。日本女子大で学生運動をしたことがあって、リーダーシップもある人でした。彼女が中心となってポーランド研究会というようなものができました。必ずしも組織的ではなかったですが。

私のすぐ下の学年に学内から斎藤千枝子さんが入ってきて、たしか私が博士課程に進学したときに東京外国語大学から加藤一夫¹¹君が入ってきました。斎藤千枝子さんは結婚して柏崎千枝子となり、その名前で全国的に有名となりました。いわゆる「ゲバ子」、「ゲバルト・ローザ」です。それで彼女はいつも暴力を振るった女性だと思われていますが、父君はたしか裁判官でした。バイオリンを弾いていて、いつもバイオリンを持ち歩いていました。絵にかいたような優等生で、駒場では英独仏だけではなく、ラテン語もギリシア語もやっていました。秀才だったと思います。そして、大学院に入ってから、というよりも修士論文を提出してから、突然学生運動に飛び込んだのです。

2人ともポーランド現代史志望でした。斎藤千枝子さんは1905年革命を扱った修論をまとめて『歴史学研究』に発表しています。今でも読めます¹²。加藤一夫君はたくさん著書や論文を発表していますから、いまさら紹介するまでもないでしょう。これらの人々を中心にそれなりの研究環境があったように思います。

¹¹ 加藤一夫（1941-）。北海道岩内郡共和町に生まれる。1968年東京外国語大学ロシア語科卒、1973年東京大学大学院社会学研究科国際関係論課程満期退学、1992年から静岡福祉大学で教鞭、学長。主著『アポリアとしての民族問題 ローザ・ルクセンブルクとインターナショナリズム』社会評論社、1991年。

¹² 柏崎千枝子「ポーランドにおける『1905年革命』の展開とポーランド・リトヴァ社会民主党」『歴史学研究』347号（1969-04）、30-38頁。

戸田さんとの関係で、一つ覚えているのは、ある英語の本の読書会です。ジェヴァノフスキ (M. K. Dziewanowski) の、*The Communist Party of Poland. An Outline of History*, (Cambridge: Harvard UP, 1959) という本です。1965 年ぐらいに読んだと思います。当時は共産党史研究から学問研究に入るというパターンがありました。当時の研究者志望の日本の学生にとって典型的でした。つまり、どの国でも共産党を中心に現代史がまわっているという考え方が底辺にあったように思います。そのテキストになったのが、ジェヴァノフスキの本のようにほとんどアメリカの歴史家の書いた本でした。当時、今でもそうだと思いますが、世界でもっとも共産党史研究が盛んだったのはアメリカでした。不思議なことにそうなのです。しかし、著者のほとんどはけっして共産党支持者ではなく、むしろ反共主義者でした。しかし、彼らは立派な学問的な手続きに従って歴史書を書いています。大学でそういう方法を身につけています。だからわれわれも読めます。右も左も関係ありません。ジェヴァノフスキの書もそうした本の一つでした。戸田三三冬さんはのちにジェヴァノフスキが教えていたボストン大学に留学してその指導を受けることになります。ただ、途中でイタリア研究、アナキズム研究に転向して、ポーランド研究を離れました。なぜ、イタリア研究に移ったのかはよくわかりませんが…。いずれにしても彼女は細かな事件史研究よりは思想史研究の方に関心があったのだろうという気がします。

1975 年に私が訪米したときに、ボストンでジェヴァノフスキに会ったことがあります。「戸田さんは残念だった。ずいぶん期待していたのだが、ある日ふっと消えてしまった」と語っていました。彼から聞いたのは、彼自身ワルシャワ蜂起の参加者だったということです。生き延びて、戦後アメリカに亡命して研究者になりました。もちろん反共的な信念の持ち主でした。おそらく「敵を認識しなければならぬ」という気持ちで共産党史を書いたのでしょう。その研究が私も含めて当時の日本の左翼がかった若手研究者のポーランド史入門書となったのは興味深いことです。

斉藤研究室の同級生を紹介すると、1 人は長谷川毅¹³ 君です。ロシア史研究者で、二月革命について有名な本を書きました。その後、スラ研に来てからは（後述）、第二次世界大戦中の日口関係の本を書いて（日本語、英語、ロシア語で出版）、これもよく読まれています。彼はロシア革命史を研究したいと思って、斉藤研究室に入りました。ただ、半年もたたないうちに、大学院 1 年のときに（中国研究者の）衛藤藩吉先生の推薦状で、米国ワシントン大学に留学してしまいました。ワシントン大学のトレッドゴールド (Donald W. Treadgold, 1922-1994) というよく知られたロシア史の教授が、駒場の衛藤藩吉先生にアメリカで博士論文を書く用意のあるロシア研究志望の学生を推薦してほしいと言ってきました。研究室の前に小さな貼り紙が出ていたのを覚えています。私もそれを

¹³ 長谷川毅 (1941-)。1965 年東京大学教養学部卒、1966 年米国ワシントン大学に留学。ニューヨーク大オズウェゴ分校、北海道大学スラブ研究センター、カリフォルニア大サンタバーバラ分校教授を歴任。主著に Tsuyoshi Hasegawa, *The February Revolution, Petrograd, 1917: The End of the Tsarist Regime and the Birth of Dual Power*, Seattle: University of Washington Press, 1981; 『暗闘——スターリン、トルーマンと日本降伏』中央公論新社、2006 年／中公文庫 上下、2011 年／新版・みすず書房、2023 年。

読んで応募しようかと思ったのですが、まあ、ロシア史だから自分と違うと思っていたら、長谷川君が応募していました。以来、長谷川君とは分野が違ったので、研究上の交流はあまりなかったのですが、個人的な交流は今日まで続いています。

それからもう1人、さきほど紹介した（イタリア研究の）上村忠男君がいました。彼も私と同学年であり、今日まで付き合いがあります。研究者の奥さんとも付き合いがあります。日本の東欧史研究に多大の貢献をした、諸君もよく知っている南塚信吾¹⁴君も、事実上私と同級です。たしか社会学研究所所属の経済史の先生に師事したので、大学院では私とほとんど行き来がなくなりました。彼がハンガリー研究を志したのは私のポーランド研究と同じ時期だったと思います。

実はわれわれの一つ上にもう1人院生がいました。金仁順氏です。大阪出身の在日韓国人で、学部時代から同じ道を歩んできましたが、1学年上なので知りあう機会がありませんでした。斉藤先生に紹介されてはじめて知り、その後大学院時代に家族ぐるみでつきあうようになりました。東学党の乱について優れた修士論文を書いたそうです。ところが、ドイツから帰って彼の姿を見ないので斉藤先生に消息を尋ねると、韓国や北朝鮮にしばしば渡航して研究したり、教えたりしていたが、あるとき北朝鮮に行ったまま戻らなくなった、おそらく粛清されたのではないかということでした。北朝鮮の政治体制の性格について身近に感じた初めての機会でした。

大学院では非常にやるべきことが多くて、すぐには東欧研究に取り組むことはできませんでした。論文指導では私は二つのテーマを抱えていました。一つは伝統的な外交史研究でした。駒場の国際関係論の出身ですから、外交史には詳しくなりますが、従来のものと違う外交史をやろうと思いました。単に政府と政府の関係だけではなく、それに地下の抵抗運動も加えたような外交関係の歴史です。これは第二次世界大戦における東欧諸国、とくにポーランドの経験を組み入れたものです。それが私の希望だったのですが、日本ではあまりにも資料が乏しく、もちろん *Foreign Relations of the United States* とか、*Documents on British Foreign Policy* とかの公文書集は日本でも手に入りましたが、地下運動に関する文献、現地語の史料は日本にはほとんど入っていませんでした。ですから、そういう研究はできませんでした。それはドイツ留学までお預けになりました。一応、成果は『スラヴ研究』に発表しています¹⁵。

もう一つ関心を寄せたのは、マルクス主義の民族問題論でした。それまでは、ご承知のように、レーニン＝スターリンの民族問題論がよく知られていて、日本でもたくさんの論文が出ていましたが、実はそれ以前にもマルクス主義者の間で長い議論の歴史がありました。議論の焦点はおのずから東欧の民族問題でした。私は、外交史から東欧問題に直接取り組むことができないあいだは、日

¹⁴ 南塚信吾 (1942-)。1965 年東京大学教養学科国際関係論課程卒、同院博士課程修了。津田塾大学、千葉大学、法政大学国際文化学部で教鞭を執る。主著『東欧経済史研究序説』多賀出版、1985 年。

¹⁵ 伊東孝之「戦後ポーランドの成立——ソ連外交とポーランド労働者党の戦術 (1943-1945 年)」『スラヴ研究』18 巻 (1973 年)、117-166 頁。

本で豊富な文献があるマルクス主義者間の議論をまとめようと思い立ちました。外交史とマルクス主義運動とはかけ離れた分野のように思えますが、私の中ではあまりそういうことは気になりませんでした。とくにローザ・ルクセンブルクに関心がありましたが、ローザ・ルクセンブルクのポーランド語論文がちょうどこの頃からポーランド国内で出始めました。それが日本にも入り始めていて、これを使えばオリジナルの史料になるかなと思いました。ただ私は、それに飽き足らず、もっと他のマルクス主義者との比較において論じたいと思いました。つまり、マルクス、エンゲルスから始めて、カウツキー、オットー・バウアー、カール・レンナー、レーニン、スターリンへと辿ろうと思いました。私はこの関係の文献はほとんど読んだつもりです。オットー・バウアーもカール・レンナーも読みました。とくにオットー・バウアーには本当に感動しました。1907年にウィーンで出た本¹⁶を夢中になって読みました。カール・レンナーも読みました。ただあまりにもこれにエネルギーをとられて、あまり東欧問題そのものに関しては成果を挙げられませんでした。その成果の一部は、マルクス主義とローザ・ルクセンブルクの問題としてのちに『スラヴ研究』に載せました¹⁷。

最後に、斉藤研究室の話ですが、私が修士課程に入ったのは1965年で、修了したのが67年の3月、その翌年（1968年）に有名な東大紛争が起きます。研究室は、事実上、空中分解してしまいました。きっかけになったのは、柏崎千枝子さんの反乱だったようです。私はこの年の夏にドイツに行ってしまったので詳細はよくわかりませんが、斉藤先生は本郷の総長室に移ってしまって、駒場に寄り付かなくなりました。そのうちに東大を辞めたいと言って、東大を辞めて学習院大学に移ってしまいました。

そういう意味では、私と上村忠男君がおそらく最初にして最後の斉藤研の学生だったのではないかと思います。研究室が空中分解してしまったので、その後の付き合いもなくなりました。私はドイツから帰ってきてからも斉藤さんを囲む飲み会には参加しましたし、追悼集『国際関係論と歴史学の間で——斉藤孝の人と学問』（彩流社、2012年）も編集しました。ただ、それは古い仲間でした。斉藤先生のより古い、学生時代からの飲み仲間が中心になっているので、斉藤先生の教え子で加わっているのは私と上村君ぐらいでした。南塚君も一度は編集委員会に出たことがあったと思いますが、寄稿はしませんでした。

当時の紛争の中にいた人にしかわかりませんが、実は紛争後激しい憎しみが残りました。お互いに口もきかないような関係となって、バリケードの反対側にいた人たちとは付き合わなくなりました。私はたまたまそのときドイツに留学したので、その対立を知らず、人間的には誰とでもごくふつうに付き合うことができる立場でした。職場では人事の問題が起きるときなどに各自が意見を出し、一票を投じなければならないときがあります。そういうときには微妙な問題となります。スラ研

¹⁶ Otto Bauer, *Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie*, Wien, 1907.

¹⁷ 伊東孝之「東欧の民族問題とマルクス主義の民族自決概念——ローザ・ルクセンブルク」『スラヴ研究』18巻（1973年）、53-96頁。

にいたときそういうケースが二つほどあったように記憶します。いずれについてもバリケード問題が起きたときは、私は日本を離れていたので、そのことでわだかまりを抱く理由がありませんでしたし、人間としても研究業績においてもいずれも申し分のない候補でしたので賛成しました。しかし、他所では必ずしもそうではなかったケースがあったように聞いています。それは紛争を体験した人々にとっては苦々しい思い出として残ったのでしょう。

4. ドイツ留学の経緯（1960年代後半）

ここで修士論文提出後、ドイツ留学を志した経緯について話したいと思います。博士課程に入って私が直面した最大の悩みは、これからどうするかということでした。ポーランド研究の旗を掲げましたが、実はポーランド学はまだまったく手付かずでした。ポーランド語さえも初歩的な段階にあって、専門書を読みこなせる状態にはありませんでした。そもそも国内には読むべきポーランド語の文献すらほとんどなく、必要な文献集めから始めなければなりませんでした。まずポーランド語を我が物にする、同時並行的に必要な文献を集める、そして文献の分析作業を行う。とすれば、博士論文に取りかかるのはしばらく先となる。しかし、時間は容赦なく過ぎてゆく。博士課程に進んでたしかに奨学金は多少増額したが、3年間しか続かない。3年のうちに論文を完成しなければ奨学金はゼロになってしまう。なんとか上に述べたような作業ができるような時間を稼がなくてはという思いが念頭を去りませんでした。しかし、どのようにその時間を稼ぐことができるかが問題でした。

考えてみると修士論文のテーマをそのまま博士論文に持ちこんで、時間不足で書き切れなかったことを書き足すのが最も賢明だったでしょう。そのような研究者はかなり多いです。学部のときの卒論を下敷きに修士論文を書き、今度はその修士論文を下敷きに博士論文を書く。そうすればかなり無駄な労力を省くことができ、スピーディに博士号に辿りつくことができます。博士号というのは学問の最終点ではなくて入口点であるとすれば、それに到達するのは早ければ早いほどよいです。奨学金をもらえる期間が決まっているということは、その決められた期間内に論文を書き上げ、提出しなければならないということです。言い換えれば、その程度の水準の論文でよいということでもあります。私は現在そのように考えています。もし今、私の研究指導下に当時の私のような博士候補生がいたなら、そのようにアドバイスするでしょう。すでに論文のアウトラインはできている。資料の読み込みも進んでいる。読んでない資料がどこにあるかの見当もついている。部分的に執筆も進んでいる。あとは全体を推敲して書き上げるだけだ。しかしそれだけでもおそらく向こう3年間は必要だろう。だからむしろ博士論文執筆の理想的な出発点といえるのではないのでしょうか。しかし、それは残念ながら当時私の念頭にまったく思い浮かばなかった考えです。おそらくそれは当時の博士論文についての一般的な考え方に沿わなかったし、私の性分にも合わなかったのでしょう。たしかに修士論文は十分にスケールの大きなテーマでした。しかし、あれは本格的なポーランド研究へのつなぎとして考えたテーマであって、そこに長くはとどまるつもりがありませんでしたし、一刻も早く次の「本格的な」段階を目指さなければならないと思っていました。

もう一つ、もし自分が修士論文のテーマにとどまって、その完成のためにさらに3年を費やすとすれば、自分がなんだかそのままそこに小さくまとまってしまうような恐怖がありました。自分はま

だ大きく成長する余地があると信じていました。自分の研究領域が日本史、日本の政治、日本の社会、日本の思想等々であれば、このまま日本にとどまった方がよいかも知れない。しかし、自分の専門は外国研究だ。外国を研究するためにはやはりなるべく早く外国に出て、外国で経験を積みなければならない。対象とした国そのものに行くことができればそれに越したことはないが、そうでなくてもその国についての研究が進んでいる第三国があればそれもよいだろう。自分はまだ 25 歳だったが、年齢とともに急速に適応力が衰えるのですでに遅すぎるような気もする。このまま国内にとどまって博士論文完成に集中していたら、外国研究者として自分が伸びるべき余地がなくなってしまうかも知れない。たとえ国内で博士号を取得したあと留学のチャンスを手に入れたとしても、おそらくはもう遅すぎるだろう。こういう恐怖が私を捉えました。

たしかにこの心配には根拠があったかも知れませんが、そもそも留学は大学院ではなくて外国語や外国の環境に適応する能力がある 10 代末から 20 代初めに 1 年間ぐらいするのが理想的だったでしょう。しかし、当時はそれが非常に難しかったのです。であれば、そのことは諦めるしかないでしょう。諦めて一刻も早く研究者としての資格をとることに集中し、そのあとで留学の機会を求めるべきだったでしょう。

私は結局留学を優先しました。今となっては間違った選択だったように思いますが、当時としては熟慮した結果でした。外国に留学するとすればどこに留学するか。これが次の悩ましい問題でした。結局ドイツに留学しましたが、当初その考えはまったくありませんでした。ポーランド研究者だろうというのであれば、留学先として考えるべきはまずポーランドでなければならなかったでしょう。しかし、当時日本からポーランドに直接留学する道はありませんでした。

ポーランドへの道が閉ざされたとなると、次にくるのは当然、米国でした。米国留学はそれほど難しくありませんでした。公的なものだけでなく、いろいろな種類の私的な奨学金がありました。しかし、私には当時米国への深い嫌悪感がありました。国としての米国にはむしろ好感があったぐらいですが、問題はその外交政策でした。私は米国のベトナム介入に反対し、機会あるごとに抗議デモに加わりました。そのような私にとって積極的に米国への留学機会を求めることには心理的に抵抗がありました。もちろん米国にはナチス・ドイツと違って言論の自由があり、ベトナム戦争反対の声もありました。研究の自由もありましたし、よりよい研究環境もありました。米国で研究しつつベトナム戦争反対の声を上げることさえできたかも知れません。にもかかわらず、いまこの時点で米国に赴くことには気が向きませんでした。

米国でないとすれば、どんな国があるか。すぐ思いつくのはイギリスです。1967 年 6 月、私はブリティッシュ・カウンシルが留学生を募集していると聞いて、応募してみました。自費留学ではなく 100% 向こう持ちの留学です。私は受験英語以外に英語を勉強したことがありませんでした。英会話などはまったく準備がありませんでした。留学するためにわざわざ準備するのを潔く思わず、なに

もせずに受験に臨みました。数千人の応募者があって、私は面接にまで進むことができましたが、そこでみごとに振られました。会話で文法を間違えていると指摘されて、通じればいいんじゃないかと腹が立ったのを記憶しています。

たしか（1967年）10月後半になにかの学会で木村靖二君（のちに東京大学文学部西洋史学科教授）に会ったときに、「君もDAADを受けるのか」と聞かれて、「DAADってなんだ」と聞き返したのを覚えています。ドイツ学術交流会、つまり西独の留学生制度の存在を知ったのはこのときがはじめてでした。それまでドイツのことは考えたこともありませんでした。歴史的な経緯や戦後の冷戦状況などがあって、ポーランド研究のためにドイツに行くのはまずいと思い込んでいました。しかし、ほかに当てもないので、思い直して木村君に「いつ締め切りだ」と訊くと、1週間後だと言います。それで慌てて事務所から書類を取り寄せ、大急ぎで書類をでっち上げました。私はドイツのポーランド研究についてはほとんどなにも知りませんでしたが、ロケーションとしてはベルリンがよいのではないかと思いました。というのは、ポーランドの国境まで約50キロメートルの距離だからです。ドイツにいながらいつでもポーランドに行けると考えました。なによりもドイツが往復の旅費と向こうでの生活費を出してくれること、学費が免除となることが有り難かったです。それで少なくとも自分の生活費は浮かすことができました。妻は職を持っていたので心配する必要がありませんでした。これは当時の私の生活設計において重要な要素でした。「時間稼ぎ」をすることができるのです。加えて、海外で生活ができるというのは夢のような話でした。なにしろ当時は1ドルが360円の時代でした。

試験は1ヶ月後でした。ブリティッシュ・カウンシルの経験に懲りて、ゲーテ・インスティトゥートというドイツ語学校に1ヶ月間通って、ドイツ人教師の下で、応急的なヒヤリングの訓練をしました。ドイツの留学試験には会話試験がありませんでした。その代わりにNacherzählung（あと語り）という独特の試験がありました。これは20分ぐらいの長さのドイツ語の文章を二回読み聞かせて、その内容を理解できた限りで、ドイツ語で再現するというものです。留学先のベルリン自由大学でも同じ形式の試験をされたのを見ると、どうもドイツではこれが留学生に対する標準的な語学能力テストのようです。私は作文には英語でもドイツ語でもかなり自信がありました。ヒヤリングの方はまるで自信がありませんでしたが、どこかで聞いたようなヤスパースの哲学の話だったので、想像力を働かせて好き勝手に作文をしました。これが当たったようです。木村君ともう1人、黒川康君（のちに東京女子大学西洋史学教授）というドイツ史の専門家と一緒にドイツに留学することになりました。

1968年8月11日、私は東大正門前でばったり山本義隆全共闘議長に会って一緒に鍋焼きうどんを食べました。山本君とは駒場寮で、同室でまる1年間一緒に過ごした仲でした。食後、誘われるままに安田講堂の中に入りました。内部には斉藤研で一緒に柏崎千枝子（「ゲバ子」）さんが

いて、顔見知りの大学院経済学研究科の福留久大君（のちに九州大学経済学部教授）に食ってかかるように怒鳴りつけていました。山本君から、どうだ、おまえもここに籠もらんかと誘われましたが、こちらは口を濁して逃げました。1週間後には私はフランクフルト行きのルフトハンザ機の客となりました。

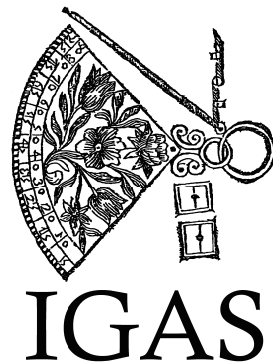
はたしてドイツ留学が自分にとって正しい選択だったかどうか。ドイツへの留学が決まってから50年以上も経ってから考えますが、結局差し引きはマイナスだったように思います。というのは、ドイツのための投資があまりにも大きすぎたからです。私は本来、ドイツとは関係のない人間でした。ドイツ史にも、ドイツ文学にも、ドイツ政治にも、ドイツ経済にもあまり関心がありませんでした。ドイツ語は第三外国語で、なにかのために役立つかも知れないと思ってとっただけでした。ドイツ人のようにドイツで生活し、勉強するとなれば、そのために追加的にそれまでとは比較にならないほど多くを注力しなければならないでしょう。その見返りとして何が得られるか。確かにドイツ語を苦労せずに読み、書き、話せるようになったのは嬉しいですが、帰国後実際にそれを使う機会はほとんどありませんでした。ドイツ人とさえ英語で話す世の中となっていました。ドイツ自体に行けばドイツ語が役に立つでしょうが、その後ドイツに戻る機会はほとんどありませんでした（ベルリン自由大学とチューリヒ大学で講義する機会は与えられましたが）。これにひきかえ英語はたしかにある程度はできるけれども、アメリカに留学した連中と比べれば比較にならないほど貧弱です。よく外国に出るということは主として英語を話して、やむを得ないときに片言の現地語を話す体験と考える日本人がいますが、私の場合はドイツにいた4年の間、一言も英語を話すことがありませんでした。英語はおろか、日本語もほとんど忘れるというほどの状態になってしまいました。1967年の秋の日のどさくさに紛れてにわかに決めてしまったのはやはり不用意だったような気がします。かといって、具体的な代替策があったわけではありませんが。

〔2024年10月：脱稿〕

（以下、第2部に続く）

編集注

i「東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会」については、同編『東欧史研究オーラル・ヒストリー vol.1 南塚信吾氏インタビュー』東京外国語大学・海外事情研究所、2024 年、5-7 頁を参照。2024 年 3 月現在、阿南大（ハプスブルク地域史）、香坂直樹（スロヴァキア現代史）、鈴木健太（ユーゴスラヴィア現代史）、辻河典子（ハンガリー近現代史）、中根一貴（チェコ近代史）、森下嘉之（チェコ近現代史）、門間卓也（クロアチア現代史）（五十音順）の 8 名がメンバーである。



東欧史研究オーラルヒストリー vol. 2 伊東孝之氏インタビュー 第1部
東欧学を志すまで——生い立ち、遍歴、留学
2026年9月25日 初版発行

編 者：東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会

発行者：東京外国語大学 海外事情研究所
TUFS Institute for Global Area Studies
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
<https://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/index.html>

ISBN: 978-4-909866-08-0

本書を無断で複写・複製することを禁じます。

ISBN978-4-909866-08-0



IGAS

東京外国語大学・海外事情研究所